

部落問題の歴史から考える

—なぜ人は差別をするのか—

はじめに

差別はよくない——だれもがわかっているはずですが、人を見下したり、なかまはずれにしたりするような悲しい行いが今もお絶えません。なぜ人は差別をするのでしょうか。よりよい人間関係を築くためにはどのようにすればよいのでしょうか。ただちに答えの見つからないむずかしい問題ですが、解決に向けて少しでも考えを深めるために、ここでは部落問題の歴史について学んでみましょう。

庭をつくる河原者

今からおよそ550年ほど前のことです。室町時代の1465（寛正6）年、京都から善阿弥という人が奈良にやってきました。興福寺の中にあつた大乘院という寺院に庭をつくるためでした。善阿弥は庭づくりの名人として知られ、当時の室町幕府の將軍足利義政からも信頼されていた人物でした。その評判を聞いた大乘院がわざわざ京都から善阿弥を招いて庭づくりをまかせたのです。



旧大乘院庭園（写真提供：公益財団法人日本ナショナルトラスト）

この時代の人びとは、庭とは神が降り立つ神聖な場所であると考えていたようです。したがって、庭石を配置し、樹木を植え、それらの間に池を造ったり、人工の川を流すといった庭づくりの作業を進めるためには、神や仏の世界について多くの知識をもち、そうした世界とかかわりあえるような人が必要であると思われていました。

善阿弥のような庭づくりにたずさわる人は河原者と呼ばれていました。河原者には神や仏の世界とかかわりあえる力があると信じられていたのです。京都の善阿弥だけでなく、大和国（今の奈良県）にも河原者がいて庭づくりにたずさわっていました。河原者は、庭づくりのほかに死んだ牛や馬の処理などの役割も果たしていました。死んだ牛や馬を処理することにはどのような意味があったのでしょうか。

死とはどのようなものか、死後の世界とはどうなっているのか——こうしたことを人間は知ることができません。死とは人間にとって永遠のなぞであり、もっとも恐ろしいものです。古い時代の人びとは、人や動物が死ねば、そこに不吉なものが生まれると感じていました。河原者にならう、死んだ牛や馬の処理という役割には、本来は死とともに発生する不吉なものを取り除くという意味があったと考えられます。つまり、この役割も神や仏の世界とかかわりあうものと感じられていたと思われるのです。

多様な仕事

神や仏の世界とかかわりあえるような人びとが存在している——こんな感覚を現代の私たちは容易に理解することができません。ところが、時代をさかのぼると、多くの人びとがこのような感覚を共有していたと思われるのです。

古い時代にあつては、嵐や地震のような自然の変化や伝染病の流行など、人間の力ではどうすることもできないような現象は神や仏の不思議な力によって生じると考えられていました。したがって、嵐や地震のような災害にあうことなく、伝染病で命を奪われず、穏やかな暮らしを続けていくためには、神や仏の世界とかかわりあえる人びとによって、災いをしずめるためのさまざまな働きがなされることが期待されていたのです。

河原者になつたような役割をつとめた人はほかにもいました。たとえば大和国では中国から伝えられた陰陽道とよばれる考えにもとづいて占いなどを行う人、人びとの幸せを祈る祝福の芸能を演じる人、亡くなった人の遺体の処理にあたる人など、多様な役割をになう人びとがいました。こうした人びとも河原者と同じように神や仏の世界とかかわりあうことによって、古いや祝福の芸能、遺体の処理などを行うことができるのだと、信じられていたようです。



『大和名所図会』より

村や町の成立

室町時代から戦国時代にかけて大和国の各地に村が生まれ、そこに暮らす百姓は田畑を耕して生活するようになります。また、街道沿いの交通に便利な場所などには商いを営む人びとが集まって町も誕生しました。前述の河原者や、古いや祝福の芸能、遺体の処理などを行う人びとも、田畑を持って農耕に精を出し、村を作っていくようになります。

こうした村や町は、農業用水の利用や災害への対策など、さまざまな理由にもとづいて多様な連携・協力によるつながりを築いていきました。このような大がかりなことは一つの村だけではできないからです。河原者と呼ばれた人たちの村も当然のことですが、周辺の村や町との連携・協力のつながりの中に入っていくこととなります。そして、そのつながりのなかで定められた義務を果たし、権利を主張していきます。

こうした側面に注目すれば、河原者や、古いや祝福の芸能、遺体の処理などを行う人びとは周辺の村や町に暮らす人びとと何ら違いはありませんでした。

しかし、一方でこうした人びとは、神や仏の世界とかかわるような場面になると、周辺の村や町の住民にはなしえないと感じられるような、死んだ牛馬の処理や古い、祝福の芸能などの働きをします。

つまり、周辺地域の人びとにとって、河原者や、古いや祝福の芸能、遺体の処理などを行う人びとは、普段の暮らしにおいては自分たちと同じような権利や義務をもつ、同じ地域の住民なのですが、時に普段とは違う（そうとしか思えないような）側面を見せる人びとであるととらえられていたと思われるのです。

被差別部落の発展

河原者は死んだ牛や馬の死体を処理するという役割をになっていましたが、こうした牛や馬の死体からは人びとの生活に役立ち、商品として売買できるようなものを得ることができました。たとえば、皮は加工して履き物などに用いることができますし、骨や皮からは膠かほを取ることができます。膠は接着剤として広く用いられていました。特に奈良では特産の墨すずりの生産には欠かすことのできないものでした。

江戸時代になると社会の平和と安定を背景として経済活動が活発に行われるようになりました。河原者とよばれていた人びとは江戸時代には「えた」とよばれるようになりますが、「えた」の村（被差別部落）では、履き物や膠などを作る仕事が増え、この結果、多くの利益がもたらされるようになりました。

こうした村には仕事を求めて多くの人が集まってきます。この結果、戸数・人口が増大していく被差別部落がいくつも出現するようになりました。農業を中心とした生活をおくっている周辺の村むらにはこのような変化は生まれません。周辺の村むらの住民は、被差別部落の人びとには神や仏の世界とかかわりあう力があると信じて何らかの違いを感じていました。そこに戸数・人口の増大によって実際に被差別部落の景観や人びとの生活が変化する様子を目にすることで、さらに違いを強く感じるようになりました。このようなことがあって、やがて周辺の住民の中に被差別部落の人との交際を避けるような、今日の差別につながる意識が現れていったと考えられます。

差別をなくすための努力

明治時代になると、新しい文化や技術がもたらされ、人びとの暮らしも変化をとげていきます。しかし、神や仏の世界とかかわりあうと感じられる役割を果たしている人びとに違いを見いだすような感覚は容易に変化しませんでした。

一方で、1871（明治4）年に「解放令」が出されたことや、自由や平等といった新しい思想が広まっていったことなどもあって、違ちがうと見られてきた人びとのなかから、これを不当な差別としてはねかえそうとする考えも生まれてきます。特に被差別部落においては、小学校の設置や、村や町の合併などの際に不当な扱いを受けることもあったので、積極的に差別をなくそうとする考えが育っていくようになりました。

さらに、明治時代の中頃から、自由な経済活動が広まり競争が激しくなるなかで、暮らしに困る人びとが増える被差別部落もみられるようになりました。このために、差別をなくすこととともに、生活の改善や向上が被差別部落の人びとにとって重要な課題となっていったのです。

こうした状況を背景に明治時代の後半から全国各地の被差別部落で差別をなくそうとする取り組みが始まるようになります。奈良県でも1912（大正1）年に大和同志会と名の組織が作られて活動を開始しました。大和同志会に集まった人びとは生活の改善などをめざすとともに、差別をなくすために歴史を探究しようとしていきます。さらに、1922（大正11）年には、奈良県の被差別部落が原動力の一つとなって全国水平社が結成され、「水平社宣言」を出して運動を展開していくことになりました。



奈良墨



大和同志会の指導者たち



水平社の指導者たち（水平社博物館提供）

未来に向けて

今、机を並べて学んでいる同級生の顔を思い浮かべてみましょう。家の近所に住んでいる多くの大人や子どもたちのことを考えてみましょう。みなそれぞれに少しずつ暮らし向きが違い、異なる文化のもとで生活を送っています。同じ本を読んでも絵を見ても、一つのテーマをめぐる意見を述べあっても、感じ方や考え方がびったり一致することは少ないのではないのでしょうか。人はみな互いに違っていて、まったく同じということはないのです。

ところが、私たちのなかには、ある違いだけを取り上げて少数の人をのけものにし、それ以外の人びとが、同じなかまのように思っおもてままってしままう、といったことがしばしば起こっています。

ここまで遠い過去から続く、日本の差別の歴史をふり返ってきました。違ちがうと思おもい込こんで、人と人の間に深い溝みちをつくってしまうことが、多くの悲しみを生み出してきたと言えるのではないのでしょうか。

すべての人が自分自身や自分のふるさとを大切に思い、それぞれの個性や能力を思う存分に伸ばして豊かな社会を作るためには、こうした歴史に学び、差別をのりこえていくことが必要です。互たがいに違いがあることを認め合い、これを尊重するような文化を、私たちは自らの力で創り育てていきたいものです。



水平社博物館（水平社博物館提供）